

つた酒桶の上のせてある銀色の、直徑一尺五寸ばかりの、丸い漏斗を取ると手を振りかざして奥へヒッコんだ。

藏男らしいのが、飯茶碗に冷酒を一杯ついで持つて来る。

僕はそれをぐつとのみほした。

穢い茶碗だ。庭に打つ突けて割る。

前の家の店員や、近所の人々が集つて見てゐる。

僕は木刀に其の漏斗を突き刺して、しつかりと庭に叩き付けて、牛若丸の母がかぶつてゐた傘のやうな恰好にして、悠然とかまへて歩るき出した。

本町の曲り角で、芝にヒヨクリ遇ふ。

「高橋君、何處へ行くの、フアザーが心配して居られるぞ」

「僕は四國遍路に寸時行つて来る、弘法大師みたいだろう」

斯う言つて別れた。

犬が吠えて不可ない。